第60回記念書玄展・第10回記念公募書玄展
テーマ「中島敦を知ろう」

と　き：令和６年５月１日（水）～６日（月・祝）
ところ：愛知県芸術文化センター８階Ｂ室

書玄展では、過去にも「山月記」「李陵」「弟子」を取り上げていますが、今回は中島敦を愛読する加藤裕会長の発案により、テーマを中島敦自身にフォーカスしました。

中島敦は、昭和十七年『文学界』二月号に「山月記」「文字禍」を発表し文壇にデビューします。続いて「宝島」の作者スティブンソンの晩年を描いた「光と風と夢」が芥川賞の候補となるなど評価は高く、短期間に次々と作品が発表されました。しかし、その年の十二月、喘息の悪化により三十三歳の若さで急逝。文壇に存在したのはわずか一年足らず。その才能が惜しまれました。

小説以外にも、漢詩、短歌、随筆、日記、書簡の類からも優れた作品があることを知り、出品者一七七名が、漢文、小説の一部や短歌を素材に一八七作品を仕上げました。

加藤裕会長は、杜甫詩「遺興」から漢字作品。大字と小字で書かれた小説「斗南先生」、多字数で書かれた小説「悟浄出世」からは中島敦の芸術論も読み取れます。「和歌でない歌」は日本語の韻律の美しさが表現され、それら大作の四部作仕立てからは、加藤会長の中島敦への深い敬愛が伝わります。

隣には、初代会長加藤大碩が斎藤茂吉の短歌「あかあかと一本の道とほりたるたまきはる我が命なりけり」を書かれた作品が格調高く並びました。

平野芳碩副会長は、「悟浄出世」から一文を選び、焦点となる「一切」の文字が鮮やかに舞うような作品を披露しました。

後藤啓太副会長の二字熟語の大字「甄陶」は天地が万物を創る意味であり、中島敦の底知れぬ創作力から受けた印象を表現しました。

溝口子靜事務局長は小説のタイトル「光と風と夢」を自由闊達に書きあげました。

役員の大きな作品は漢字・詩文書と題材も様々あり、額のサイズも縦長・横長・四角と多様でありながら、色を抑えた表装の効果から会場内は静穏な展示となりました。

会員と公募の小額作品一三七点は、加藤会長が小説の一節を書かれたやや大きな作品四点を小額群の中に配置することにより壁面に抑揚のあるリズムが生まれ、多くの来場者から好評を得ました。

ご多用の中、また遠方よりご来場いただきました皆様に厚くお礼を申し上げます。